



TITLE:

# アダム・スミスの地代論について (経済學史特集)

AUTHOR(S):

溝川, 喜一

---

CITATION:

溝川, 喜一. アダム・スミスの地代論について (経済學史特集). 經濟論叢  
1952, 69(5-6): 244-271

ISSUE DATE:

1952-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132255>

RIGHT:

京都大學經濟學會

# 經濟論叢

第六十九卷 第五・六號

我國の當面する金融問題と今後の金融政策…………… 鈴木 剛

經濟學史特集

~~~~~  
ペッティ勞働價值說の一考察…………… 松田 弘三

アダム・スミスの地代論について…………… 溝川 喜一

統計的推理と統計的法則…………… 足利 末男

ジェントリ論…………… 角山 榮

---

昭和二十七年六月

## アダム・スミスの地代論について

溝 川 喜 一

アダム・スミスは、彼に先行する經濟理論を『國富論』に集大成した。スミスは正に「綜合的勞作と調和的敘述の人材」(シェンベーター)であり、この點が『國富論』の著しい特色をなしている。けれどもそれは單なる集大成に終るものではなかつた。いうまでもなくスミスは、國富は何から成立つてゐるか、それはどのようにして作られるか、さらにまたそれを増加するためにはどうしたらよいか、ということを彼の中心課題とした。こうした課題に對してスミスは、國富を、國民が年々消費するところのあらゆる生活必需品および便宜品として、またその國民の年々の勞働生産物として把握し、この國富が資本の蓄積と、勞働生産力の改善とによつて増進される點の分析に重點をおいた。實にこの點が『國富論』の全篇を貫くライト・モチーフをなしている。

といつても『國富論』の體系が論理的齊一性をもつた、首尾一貫したものだということではない。スミスにおける日常的經驗乃至は現象的把握と、歴史的經驗乃至は本質的把握との交錯、さらにまた彼の綜合性の故に、その體系には融和し難き相矛盾した諸概念が混在していることは事實である。

本稿の課題たる地代論についても、このことは例外たり得ない。スミスの地代論は先行の諸學者のそれに比す

れば著しく包括的、體系的であり、従つてまた、その後の地代論の歴史において展開されて行く、種々なる地代論の萌芽的形態を包蔵している。その故にこそ彼以後の地代論の發展に基礎と源泉とを與えて來たのである。しかし同時に、スミスの地代論はその説くところ必ずしも明確ではなく、またそこに含まれている矛盾も看過し得ない。たとえば地代を一方では商品價値の「分解部分」として、他方ではその「構成部分」として考えた點や、また自然價格論より出發しながら地代をその構成要素より除外した點に、最も典型的に現われている。

かくて從來のスミス地代論の研究においては、スミスが地代について與えたいろいろな説明を平面的に並べることや、その論理的矛盾の追及やがなされてきた。さらにまた研究者の理論的立場の先行形態がスミスに見出される點より、その一面のみが強調されてきた。しかしながら、スミスの地代論は最初のべたような國富の増進という視角から再検討してみなければならぬ。それはいろいろな説明や矛盾を含んでいることは事實であるにしても、このことはそれが支離滅裂だということではなく、國富の増進という統一原理に基く全體の構成の中に、融合し織り込まれているのである。以下において私は、從來の諸研究に多くのものを學びつつ、スミスの地代論がその基本線において、彼の全體系の基本的視角と、どのように關聯しているかを明にしたい。

## 二

### (一) 地代論の前提——土地所有

およそ地代論が何らかの意味において土地所有を前提とすることはいうまでもないが、スミスは土地所有をどのように把握していたか。まずスミスが最初に地代に言及している言葉——それは第一篇第六章においてである

が——がイギリス古典經濟學の地代論において特徴的である。すなわち「ある國の土地がすべて私有財産となるや否や、地主もまたすべての他の人々と同じく、彼等がかつて時かなかつた場所で收穫することを好み、その自然的な生産物に對してすら地代を要求する。」(Wealth of Nations, Cannan's edition, I, p. 51 大内兵衛譯 岩波文庫版『國富論』(一)一〇四頁) スミスは土地の使用に對して地代が支拂われるのは、土地が全面的に私有財産となつたからだという。ここで注意すべきは單に土地の部分的な所有ではなく、一國の土地がすべて私有財産となり、しかもそれが社會の特定の人々によつて所有、獨占<sup>1)</sup>されていることに土地所有の意義が理解されていることである。従つて單なる地代要求力としての根據、あるいは地代の社會的歸屬條件としてのみならず、土地所有が資本の土地への投下に對する障害あるいは抵抗をなすものとして把握<sup>2)</sup>されている。だからスミスにおける地代は、本来的には土地一般に對して支拂われるところの、従つて差額地代とは區別されるところの、一般的地代として現われる。従つてまた當然、耕境地においても地代が成立することとなる。

ところでかかる全面的土地所有についての一般的な規定は、第三篇第二章「ローマ帝國沒落後ヨーロッパ諸國が農業を阻止したことに對して」のなかで、歴史的・具體的にのべられている。ここでスミスは、ノルマン征服に續く封建的土地所有の形成をのべるに際して、土地所有がその成立の第一歩より全面的土地所有の性格をもつものたることを、次のように書いてゐる。「その混亂が収まらない時に當つて、これらの國々の首長戸魁は、これらの國々の土地の大部分を獲得または横領した。そしてその大部分は未耕作のままに放置されたが、未耕と既耕の別なく、尺寸の地と雖も所有者の定まらないものはなくなつた。それは全部壟斷せられ、しかもその大部分は少數の豪族によつて壟斷せられた。」(I, p. 330 譯(二)一八九頁) としてかかる封建的土地所有に基く農奴制が

分益小作制→獨立自營農制→資本制的借地農へと推轉する過程の歴史的敘述の中に於いて、絶えず全面的な土地所有の獨占が想定されている。

(1) 差額地代の發生條件としての土地經營の獨占と、絶對地代の發生條件としての土地所有の獨占との區別が、地代の分析にとつて重要な意義を有するが、(山田勝次郎「地代論論争批判」一二五—七、一六五—一七〇頁参照) スミスが土地所有について語るところは、後者に近いと思われる。

(2) スミスにおける土地所有の意義については、田中定「正統學派地代論の研究」(九州大學法文學部十周年經濟學論文集、昭和十一年所收)七頁以下に詳しい。田中氏は、スミスにおける土地所有の獨占という地代の條件を明にし、そこからスミスの地代論を「自然的地代」の理論として統一的に認識し、リカア드의地代論とは別箇に、正統學派の地代論においてスミスが重要な地位を占むべきことを強調される。この點は全く正しいと思う。しかしそれは地代の範疇に關しての統一的認識であり、地代の源泉、地代の變動にまでは及んでいない。

なおスミス地代論における絶對地代の萌芽的存在を分析したものに、島崎隆夫「アダム・スミス「地代論」の「考察」」(三田學會雜誌第四十一卷第三號)がある。

## (二) 分配範疇における地代の特質

以上のように、スミスの地代は基本的には如何なる土地に對しても支拂われる一般的地代として現われる。それでは賃銀、利潤、地代という分配範疇において、地代は如何なる特質を持つものとして把握されたか。スミスは第六章の價值論や第七章の價格論において地代に言及している。第六章においては主として勞働によつて形成された商品價值が、賃銀、利潤、地代に分解するという、いわゆる投下勞働價值説に基く價值分解論によつて地代を説明している。この點は純生産物＝地代として把握し、しかもそれを土地の自然的な生産力によつて基礎づけたフィジイオクラートからの大きな前進であり、スミスの近代性を示すものとして屢々指摘されるところであ

る。けれどもスミスは、そこにおいて分配範疇における地代の特質については、何等説明を與えず、「土地から得られる収入は地代と呼ばれ、地主に屬する」(L. p. 34 譯(一)一〇頁)と書いて止る。しかも地代は、分解の順位において、(一)賃銀や利潤と全然同じ資格で併記されているか、(二)地代が先ず第一の分解部分であり、次いで賃銀が更に利潤が支拂われるか、(三)地代と賃銀とが先ず控除され、その殘餘が利潤として支拂われるか、この三つである。他方、スミスはいわゆる支配勞働價值説に基く價值構成論によつて地代を説明する。そしてかかる觀點から第七章において、自然率における賃銀、利潤、地代の合計によつて商品價值＝自然價格が構成される。しかしここでも單に三つの部分から商品價值が構成されるというに止り、分配範疇における地代の特質には何等觸れられていない。否、かかる觀點からはそれは問題にすらなり得ない。

スミスが價值分解論をとるにせよ價值構成論をとるにせよ、ここでは地主 landlord 勞働者 labourers 農業者 farmer という三つの階級の成立が想定され、從つて夫々に地代、賃銀、利潤が與えられることが想定されている。だからスミスは、價值論との關係における地代の説明において、封建制地代としての勞働地代、生産物地代、貨幣地代、あるいは資本制地代への過渡的段階としての分益農制地代を論じているのではない。しかし、農業において三つの階級の成立が想定され、あるいは穀物の價格が、地代、利潤、賃銀に分解するといっただけでは、資本主義的地代の特質についての説明にはならない。いうまでもなく、資本主義的地代の特質は、農業資本家の平均利潤を差引いた殘餘という點にある。だから地代は、分配範疇における分解の順位では第三順位を占むものといわなければならない。ところでかかる意味における地代は、スミスがそれを立入つて分析する「土地の地代について」と題する第十一章に至つて始めて一應正しく把握される。すなわち「賃銀を支拂ひ農業者の資本に對

しては普通の利潤を與えて之を償つた上で、なお地主の手に残る殘餘」(T. p. 169 譯(一)三〇八頁)として理解される。そして第十一章の地代とはこのような資本主義的地代なのである。

(1) 「あらゆる社會においては、あらゆる物品の價格は、結局これら三部分の内のいづれか一に、またはその全部に分解せられるのである。」(T. p. 53 譯(一)一〇五頁)

(2) 「穀物の價格においては、一部分は地主の地代を支拂い、次の一部分はそれを生産するために使われた勞働者および役畜の賃銀または維持費を支拂い、更に第三の部分は農業者の利潤を支拂うのである。」(T. p. 53 譯(一)一〇五頁)

(3) 「しかしながら、如何なる物品の全價格も、結局は右の内どれか一つ、二つ、または三つに、分解せねばならない、というのは、土地の地代と、それを育て、製造し、市場に搬出するに用いられた全勞働の價格を支拂つてなお何等か残りがあるならば、それは必ず誰かの利潤でなければならぬからである。」(T. p. 54 譯(一)一〇八頁)

また第八章においても次のように書いている。「彼の地代は土地の上に使われている勞働の生産物からの第一の控除をなす」「利潤が土地に使われるところの勞働の生産物からの第二の控除をなす。」(T. p. 57 譯(一)一三三頁)

(4) スミスは、第十一章にいたるまでは地代を他の分配範疇と區別しなかつたが、第十一章においては地代を分解の順位において他の分配範疇の次位に立つと考へた。従つて地代に關する第十一章以前の規定と第十一章の規定は、一般的な規定から特殊な規定への發展として理解されるべきである。この點は既に田中定氏によつて鋭く指摘された。(田中定 前掲論文三八頁)

しかし第十一章にいたるまでのスミスの地代について、「彼は土地所有を、その歴史的諸形態を問ふことなく、あらゆる歴史的形態の土地所有にも共通する側面のみを把えて考察した。……従つてそれに照應するところの地代はあらゆる形態の地代たりうる」と解釋されるが、價值論との關係におけるスミスの地代は、封建地代や分益農制地代でないことは既に述べた。それは、第六章においてスミス自らが書いているような、自家の所有地を經營し、耕作の費用を拂つた後に地主の地代と農業者の利潤を得る人地主 *gentleman* や、地代を支拂つた後に賃銀と利潤とを得る普通の農業者 *common farmer* が、なお併存している状態の反映と見るべきだと思う。大農の優越、従つてまたそのために小農が驅逐されたことを主張するトインビー (Toynbee, *The Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, ch. 5) に對して、輪裁式が一種の防波堤の役割を果たした



ために、大農によつて小農は必ずしも驅逐されなかつたとするレイビイは、資本主義的經營の外に右二種の經營形態の併存を實證した。 (H. Levy, Entstehung und Rückgang des landwirtschaftlicher Grosstetriebs in England, 1904, S. 3)

### (三) 地代の源泉

以上においてスミスの地代は、基本的に一般的地代であり、しかもそれは資本主義的地代として把握されていることを見た。それではかかる意味における地代は如何にして形成されるか。スミスは土地の生産物を、常に地代を生ずる土地の生産物と、時として地代を生じ時としてそれを生ぜざる土地の生産物とに分つ。前者には食料品が、後者には衣住品が該當する。<sup>1)</sup>ところで前者に地代が生ずる原因としてスミスは二つを擧げる。(一)「人類は他の動物と同様、その生活手段に比例して増加するものであるから、食物に對しては常に必ず多少の需要がある。」(U. p. 145 譯(一)二八四頁)として食物に對する需要の特殊性、すなわち食料は自ら需要を創造し得、從つて必ず販賣されるということを指摘する。しかしこれだけでは、この特殊の商品が何故地代を生ずるかという論證にならない。そこで(二)「その位置の如何を問はず、たいていの土地は、食物を市場に齎すに必要な一切の勞働を、いやしくも勞働を維持する方法としては最も優遇的な程度において維持する以上に、多くの食物量を生産する。否、その剩餘は、勞働を使用したその資本を、それに利潤を附加して回収してなお餘りあるものである。故に、地主に對する地代となつて何程かは必ず残るのである。」(U. p. 145 譯(一)二八四—五頁)として土地そのものの自然的生産力を擧げる。だからスミスのいう、土地の生産物を市場に持ち來すために使用されねばならなかつた資本と、それに普通利潤とを加えたものを、マルクスに從つて充分な價格と名付けるならば、<sup>2)</sup>農産物の普通價格から、この充分な價格を差引いた殘餘としての地代が、食料(常に地代を生ずる土地の生産物)に生ずる

のは、何よりも土地の自然的生産力の故であるということになる。

しかしこのようにして把握された地代は、使用價值たる生産物での剩餘であるに過ぎない。それが交換價值を持つためには、必ず有效需要者 *effective demander* (I, p. 38 譯(一)一五頁)を見出して販賣されることが前提となる。この點が第一の規定である。かくしてスミスの地代は、土地そのものの自然的生産力に基因するとスミスがフィジオクラートの考える土地生産物の超過分が、いわゆる販路説的な考え方に媒介されて、充分な需要によつて支へられているところに成立する。

スミスにおける地代の源泉について、人間の食物に對する需要は絶えずその供給よりも大であるから、その價格は常にその生産費を超え、従つて地代が生ずると、一般に解釋されている。そしてこの點よりスミスの説明は需要・供給あるいは稀少性原理によるものだといわれる<sup>3)</sup>。けれどもここでスミスのいう地代は、需要と供給によつて變化する、單なる價格現象の變動に還元さるべきものではなく、生産過程より生じた、使用價值視點で把握された生産物の剩餘が、いわゆる販路説的な考え方に媒介されて交換價值を持つものとして考えねばならない。だからそれは實質的な基礎をもち、國民生活の内容を豊かにする物としての國富の一環をなすものと見なければならぬ。またスミスは、「あらゆる種類の動物は、彼等の生活資料に比例して自然的に増殖し、如何なる種類のものもこれを超えて増殖することが出来ない。」(I, p. 81 譯(一)一五九頁)として、マルサス的人口論を説いているが、これは人口の増加は基本的には食料によつて制限されるから、長期的に見れば食料の需要と供給とは一致するということである。だからスミスにおいて、食料の需要が供給を絶えず超過しているとは考えられないのであり、この點からも食料の需要が供給を超過すること自身が、地代の源泉であると見ることは出来ない。

- (1) ヴォーザーによれば、かかる區別もフイジ・オクラーートの理論であり、既にヴォーダーに見られる。(Leser, Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie, 1881, S. 61)
- (2) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, S. 139
- (3) 例えば、中山伊知郎『スミス國富論』一〇六―七頁。高島善哉編『スミス國富論講義(二)』七四頁
- (4) スミスにおける富の分析については、内田義彦「イギリス重商主義の解體と古典學派の成立(上)」(潮流社經濟學全集所収)二六一頁以下に詳し。

### 三

以上においてスミス地代論のいわば本筋ともいふべきものを取出して、その定義と源泉について見た。けれどもスミスの體系全體がそうであるように、その地代論もまた、これ以外のいろいろな説明を含んでいる。そこで次にこれらの説明がその基本的な本筋と、どのような關係にあるかを見よう。

#### (一) 地代範疇

##### (1) 差額地代

先にスミスの地代は、彼の土地所有についての把握のしかたより、基本的には一般的地代として現われることを見た。けれどもその定式化や、一般的地代との關係は明確ではないといへ、差額地代の觀念が存在している。すなわち第十一章の第一節において一般的地代をのべたすぐ後で、「土地の地代は、その生産物の何たるを問わず、その土地の沃度によつて變化する、variesのみならず、その土地の沃度の如何を問わず、その位置によつて變化する。」(傍點筆者 L. p. 148 譯(一)二八五頁)といつてゐる。しかし沃度と位置によつて生ずる差額地代は、

彼の一般的地代と兩立し得ぬものではなく、一般的地代が沃度と位置の差によつて變化するに過ぎないのである。また第二節においては、「ある炭坑が地代を生じ得るか否かは、一部はその豊度に一部はその位置によることである。」(L. p. 165 譯(一)三二八頁)と言っている。<sup>2)</sup>ここでは豊度と位置の差等のみによつて地代が生ずるかの如くである。しかしこの地代は、鑛山地代についてのみであつて、「土地財産の場合は、右と違ふ。その生産物もその地代も共にその絶對的な豊度に比例するのであつて、その相對的な豊度には比例しない。」(L. p. 174 譯(一)三三四頁)と斷つてゐる。しかも鑛山地代についても、もし地代が存在しない場合には、「地主は、他人が採掘しようという場合には、何程かの地代を支拂わなければそれを許さない」(L. p. 165 譯(一)三八一九頁)のであるから、企業家にして同時に地主を兼ねる同一人格によつてのみ經營が可能となることを認める。従つてゆゑゆる耕境地において、地代が存在しなければ、右の經營形態以外の方法では廢抗になることが想定されてゐる。以上によつてスミスの差額地代が、彼の基本的立場である一般的地代と矛盾するものではなく、それを具體的に修正する意味を持つこと、またそれが本來の意味において説かれてゐるのは、鑛山地代についてであり、しかもそこでも結局、耕境地における地代の消滅が否定されていることは明である。

- (1) この引用に續いてスミスはまた、都會の附近の土地は僻遠の地方の同じ位肥沃な土地に比較してヨリ多くの地代を生ずる。」(傍點筆者 L. p. 148 譯(一)二八五頁)と書いてゐる。

- (2) リカアドはこの部分を引用して「地代理論の全てはここに見事に、かつ明瞭に説かれてゐる。けれどもこの一言一句は鑛山に對すると同じく、土地にも適用せらるべきである。」と云つてゐる。Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*, 1817, Gomer's edition, p. 316. しかしこれはリカアドの立場からそうなのであつて、スミスにおける差額地代論の位置とは別問題である。

## (2) 獨占地

スミスは特殊の地質や位置に依存する果樹などについて、獨占價格に基く獨占地のあることを指摘している。第七章において、ある商品が普通に賣られる現實の價格たる市場價格が、あらゆる商品の價格が常にそれをめぐつて引きつけられているところの中心價格としての自然價格を、長年にわたつて超過する例として、フランスの葡萄園の地代を擧げている。すなわちある自然の生産物は、非常に特別な地味と地位とを必要とし、それを生産するのに適する特殊な土地が稀少であつて、従つてその生産物が有效需要を滿すに足らないとすれば、かかる生産物は自然價格以上で賣られる。しかしこの場合、「そういう商品を市場に齎すために使用せられている勞働の賃銀と資本の利潤とは、近接地で他の仕事に使われている勞働や資本のそれ等に對して、その自然的割合を失ふことは餘りないのである。」から、「この價格部分の内土地の地代に分解せられるものが、通常、地代の自然率以上に拂われる部分である。」(L. p. 63 譯(一)(二四頁)と。同様のことは第十一章においても述べられ、(L. p. 156 譯(一)三〇〇—一頁)特殊な風味の葡萄酒や、西インドの砂糖植民地、ヴァージニアおよびメリーランドの煙草農園などを、その例として擧げている。

右の説明は、一見獨占價格に基く獨占地代の説明のようであり、またスミスにおける獨占地代概念の存在が指摘される一つの根據ではある。けれども重要なことは、スミスのいう獨占地代は、自然率地代Ⅱ一般的地代、以上の地代部分について語られていることである。だからこの獨占地代については、自然率地代以上の部分が、特殊な土地生産物の、特殊な需要・供給關係によつて形成されることが説かれているに過ぎない。従つてそれは、彼の基本的立場である一般的地代と兩立し得ぬ概念ではなく、後者を具體的に修正する規定として考えねばなら

なす。

(1) 例えば越村信三郎「スミス研究」一五二頁（經濟學講座所収）

## (二) 地代の源泉

以上地代範疇として、スミスには差額地代、獨占地代の概念は含まれているにしても、それらは一般的地代の具體的修正規定として見るべきものであることをのべた。次に地代の源泉の問題についても、スミスの説くところは單一ではない。たとえば、ダグラスは、勞働生産物からの「控除」deduction という説明の外に、「獨占」monopoly、「便益の差」differential advantages、「自然の恩恵」the bounty of nature のあることを指摘しているが、なおこの外に、需要、供給に基く説明のあることは周知のところである。そこで以下においてこれらの説明が、すでにのべた彼の基本的説明と、どのような關係にあるかを検討しよう。

### (1) 勞働生産物からの控除

これはまた、剩餘價值の一派生形態としての地代、獨占勞賃説（自然的勞賃からの控除 Abzug）ともいわれる。これはいわゆる價值分解論と關聯して説明されたものであり、スミスの全く新しい立場を示すものであつて、彼を彼以前の學說から截然と區別するものである。

ところでスミス價值論の問題提起は、先ずもつて財貨と貨幣、または他の財貨と交換するについて、人々が自然に守るところの法則は如何なるものであるか、を研究する點にあり、この交換の法則が價值論の端緒となつた。そしてスミスにおいては、この價值論はそれ以上分配論にまでおし進められなかつた。だから彼の分配論は、一應價格理論の系として挿入されている、という外觀を呈するにいたる。もし價值論を分配論にまでおし進めるな

らば、たとえばリカアドのなしたように、各分配範疇の對抗關係は明らかとなるが、スミスではまだこうした段階には立ちいたっていない。しかも差額地代と價值論との關係を意識的に問題としたリカアドにおいてさえ、また價值と富とを峻別したリカアドにおいてさえ、土地豊度や位置の差等（第一・第二形態）、同一土地への逐次的資本投下の結果の差等（第三形態）に基く差額たる剰餘は、剰餘生産物であり必ずしも剰餘價值ではなく、従つて地代は價值論によつて説明されたとはいえない。スミスの地代は差額地代ではなく一般的地代であるが、これを絕對地代として限定して説明するためには、少くとも資本の有機的構成の問題と、平均利潤の均衡化過程における土地所有の意義とを明確に把握することが前提となる。スミスの價值論ではこれらの前提は解けず、従つてまた彼の課題である資本主義的地代としての一般的地代を價值論によつて説明することが出来なかつた。

かくて、地代の源泉に關する勞働生産物からの控除という説明は、價值論の範圍内でのみ行われたのであり、従つて前節でのべたようにこの説明は資本主義的地代についてのもではない。第十一章における資本主義的地代の源泉についてはフイジオクラートの自然的生産力による使用價值の剰餘が、同時に販路說的考えに媒介されて交換價值を持つと考えたのである。

- (1) P. H. Douglas, *Smith's Theory of Value and Distribution*, (Adam Smith, 1776—1926, by J. M. Clark etc, 1928) p. 112

—3—

- (2) Marx, a. a. O. I. S. 143
- (3) F. Oppenheimer, *David Ricardo's Grundrententheorie*, 1917 S. 27.
- (4) E. Cannan, *History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy*, 1894, p. 186
- (5) この點については、嶺正夫氏の優れた分析「農業經濟學序説」一二五頁以下参照。

## (2) 自然の恩恵

すでにのべたように、資本主義的地代の源泉についてのスミスの説明は、フィジイオクラートの自然的な自然の恩恵という考え方を基礎にしている。しかし問題は何故かかる説明が持ち出され、またそれが彼の體系全體から見てどのような關係にあるかということである。<sup>1)</sup>

産業利潤が所得の正常的な範疇として確立されていなかった段階に立つケネーは、資本蓄積の基礎となるべき費用を超える社會的剩餘を、唯地代の形態でのみ把握した。この點はスミス以前のイギリス經濟思想、たとえばカンティヨン、ペティ、ロックにおいても同じである。しかるにスミスはこの社會的剩餘を利潤と地代との形で把握し、<sup>2)</sup> しかも地代を資本主義的地代として一應正しく規定した。しかもそれは一般的地代の性格をもつものであり、かかる地代を説明せんがため、またその限りにおいてのみ、フィジイオクラートの學說を授用したのであつた。従つてその説明方法はフィジイクラートのものではあるにしても、その説明對象となつた地代の内容が異なることを注意せねばならない。かくてスミスは、その利潤論については一應價值論の規定を貫き得たのであるが、地代論にはすでにのべたように彼の價值論を貫き得なかつた。しかして、かかる三位一體公式に轉化する土地の自然的生産力の概念を打破つたのはリカアドであるから、<sup>3)</sup> 分配理論の客觀的な流れにおいて、スミスをケネーとリカアドとの中間に位置づけることが出来るであらう。

スミスは屢々「マニファクチュア時代の經濟學者」と呼ばれる。イギリス古典經濟學において、スミスをリカアドやマルサスから區別するものは、實にその間に産業革命の過程が介在するか否かということに外ならない。ところで産業革命の前段階においては、一般に、すべての産業の内、農業においてはその生産に自然力が重要な



地位を占める。すなわち土地がその生産において決定的に重要な地位を占めるとともに、また氣候などの本來的な自然がその生産に大きな影響を及ぼす。ところが工業における自然力の利用は、工業が比較的高い發達段階に達して始めて顯著となる。すなわち蒸汽力、水力、熱などの自然力や、さらには分業や協業から生ずる勞働の社會的自然力の利用は、産業革命の過程を経て始めて顯著となる。こうした事情を顧みる時、スミスの地代論の中に素朴な自然力の觀念が基礎になつてゐることは、その時代的な基盤からも考えられる。

ところで個人の幸福、そしてまた個人の經濟的活動の自由に媒介されて實現される社會の一般的幸福 *general welfare of society* (I. p. 3 譯(一)一九頁)の指標たる富が、その國民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便宜品として、またその國民の年々の勞働の生産物として説かれた『國富論』冒頭の一句は餘りにも有名である。そこでスミスは富を、使用價值を基盤とするものとして把握した。だからスミスが價值論の初めにおいて、「價值の二律背反」の問題に當面して、使用價值を價值の規定から排除したとはいへ、スミスの課題が富の問題である以上、スミスの體系では價值と富とが屢々混同され、かつ兩者の増加が平行的、調和的に考えられることとなつた。ところで地代はすでにのべたように、先ずもつて使用價值としての剩餘生産物として把握され、それが同時に交換價值をも持つものとして考えられた。従つて地代が、價值と富との區別の不明確さから、ファイジオクラートの考え方からではあるが、富の一環として考えられていたことは明である。資本主義の成立期において、國民の生活を豊にし、資本蓄積の基盤となるべき富の生産を増大することが、何よりの經濟的課題であつた歴史段階において、スミスの考え方は必ずしも矛盾したものでないばかりか、大なる意義を持つていたのである。地代についてのかかる考え方が、産業革命の過程を經過して、各階級の對抗關係が漸次霧呈される歴史段

階に至つて、なをそのまま主張されるとすれば、それが如何に地主階級のアポロジに墮するか例は、われわれはマルサスにおいて見出すことが出来るであらう。

(1) ベーレンズは、スミス地代論の支配的な基本的思想を「人間は生産する。しかし自然もまた生産するのであつて、その生産物が地代である。」という點に求め、フイジオクラート學說との同一性を強調する。しかしそれ以上の追及はなされていない。Edvard Berens, Versuch einer kritischen Dogmengeschichte der Grundrente, 1868, S. 63 f.

(2) Ronald L. Meek, *Physiocracy and Classicism in Britain*, *The Economic Journal*, March 1951, p. 30

(3) 「製造業において、自然は果して人間のために何もなさないか。われわれの機械を動かしたり、航海を助けたりする風力や水力は、果して何もなさないのであるか。われわれをして最も巨大な機械を動かすことを得しめる大氣の壓力や、蒸汽の伸縮力は、果して自然の賜ではないであらうか。金屬を柔軟にし、熔解する熱の効果、染色や醗酵の過程における空氣の分解力などはいうまでもない。自然が人間にその助力を與えない、しかも非常に寛大に無料で與えない、というような製造業は一つもないのである。」とリカードはいつている。そしてリカードでは自然の吝嗇、ingratitude of nature が地代の原因となる。(Ricardo, *Ibid*, p. 53—4)

(4) スミスにおける社會の一般的幸福については、木村健康「ケンブリッジ學派におけるアダム・スミスの傳統」(理論經濟學の諸問題所収)二三頁以下

(5) 岸本誠二郎「勞働價值論の研究」四三、七七頁

### (3) 需要と供給

スミスは第七章において商品の自然價格と市場價格との關係を論ずる際、現實に市場に提供される數量と、有効需要との關係から、自然價格を中心として市場價格が變動することを明かにした。すでにのべた獨占地代もかかるもの系として考えることが出来る。ところで、ここでの自然價格には自然率における地代が含まれており、たとえ需要と供給とが一致して、自然價格と市場價格が一致しても地代は存在する。従つて需要・供給の變

動によつては自然率における地代が説明されずに残ることとなる。ところが第十一章にいたるとスミスは、需要・供給そのものによつて地代の本質的な説明をなしている。

すなわち第二節において、時として地代を生じ、時としてそれを生じない土地の生産物、つまり衣住品については、需要・供給、乃至は稀少性原理によつて地代を説明している。スミスによれば、土地は原始未開の状態の下においては、養い得る以上の人口に對して、はるかに多くの衣住の材料を供給することが出来た。従つてこの状態の下においては、衣住の材料が過剰であつて、そのためにそれ等は往々ほとんど無價值またはそれに近く、その大部分は不用のものとして遺棄され、また使用されるものの價格も、それを得るに必要な労働および費用に等價であつて地代を用じない。しかし改良された状態においては、人口に比して衣住の材料は稀少となり、ために必然にその價值が高くなる。かかる状態の下においてはそれらは全部使用され、またそれに對する需要が供給以上に上ることが少くない。従つてこれらを市場に齎すに必要な費用以上に、衣住品の價格が騰貴して地代が支拂われるにいたるのである。

このようにスミスは需要・供給關係から衣住品を生産する土地の地代を説明する。しかしここで注意すべきは、「食物に對する欲望は人間の胃の腑の能力に限度があるので、すべての人々において一定である。」(T. p. 160 譯 (一) 三二六頁) という前提から、土地の改良と耕作に基く社會的勞働生産力の發展の結果、消費し得る以上の食料の殘餘が、衣、住、家具などの他種の欲望に向けられ、その結果この種の需要が増大すると見ている點である。それ故、「人類の食料を生産する地の地代が、他の耕地の大部分のそれを規定する」(T. p. 160 譯 (一) 三〇七頁) あるいは、「食料はかくの如くにして地代の本來の源泉たるのみならず、後に地代を生むに至る土地の他の生産

物の一切は、その價值中地代に歸すべき部分を、食料を生産する勞働力が、土地の改良および耕作によつて増進したことから引き出すのである。」(L. p. 165 譯(一)三二七頁)ということになる。かくてスミスが地代の源泉を需要・供給關係そのものから説明しているのは、衣住品についてのみであり、しかもかかる地代は食料を生産することが容易になつたことを基礎にして説明されているのである。

#### (4) 獨 占

「それ故に、地代は土地の使用に對して支拂われる價格と考えられ、自然、一種の獨占價格である。」(L. p. 146 譯(一)二八二頁)というスミスの文章は、地代の源泉を獨占到求めているかのようなものである。しかしスミスがここで意味しているところは、廣義の利潤の内、平均利潤を超過する額が、土地の全面的所有獨占到基いて地主の地代となるということで、地代の源泉の説明ではない。「土地所有なるものは、現實的生産行程の上に何等關係するところがない。その役割は生産された剩餘價值の一部を、資本の懷から自分自身の懷に移轉するということに限られている。」のであるから、獨占そのものが地代の源泉とはなり得ないし、またスミスにおいてもかかる説明は見られない。

(1) なおこの獨占についてオッペンハイマーは、資本主義的地代の原因が、いわば封建社會よりの殘滓としての土地所有であるという點より、スミスに「完全なる獨占理論の最初の發見者としてのスミス」という賞讃を送っている。リカアドの地代論については、その差額地代論を彼の獨占理論の體系に翻譯して承認し、しかして限界土地の獨占、從つてまたそこにおける勞働の搾取を強調する點において、誠に鋭いものがある。しかし、スミスについては、その土地所有の封建的獨占を強調することは、スミスが區別した封建地代と資本主義的地代を混同するものといわなければならない。

#### 四

以上においてスミス地代論の靜態的な部面を考察し、それがいろいろの要素を含むとはいへ、基本的には國富の一環であることを明かにした。ところで、「ある商品の市場價格における隨時的・一時的變動は、その商品價格の諸部分の内、賃銀と利潤とに分解される部分に、主として影響する。地代に分解される部分はこれに影響されることは比較的に少い。貨幣にて確定してゐる地代は、その率においても、その價值においてもこれによつて影響を受けることは全くなく。」(T. p. 61 譯(一)一二頁)とスミスは書いてゐる。確かに地代が小作料という形態をとる限り、それは小作契約期間を通じて固定的な大きさであろう。しかし單に個別的な土地所有者の所得となる地代ではなく、いわば範疇的な地代を理論的に問題とする限り、それは他の經濟的諸量と同様に變化するものでなければならぬ。地代の長期的變動についてのスミスの考え方の特殊性は、從來あまり取上げられなかつたようであるが、以下においてこの點を考察しよう。

すでにのべたようにスミスは、地代を農産物の普通價格から、充分な價格を差引いた殘餘であると定義した。従つて地代の變動は、(一)農産物の普通價格を一定と假定すれば、費用および普通利潤の變動に、(二)充分な價格を一定と假定すれば、農産物の普通價格の變動に依存する。かくて農産物の普通價格(これは需要・供給の如何によつて變化するものであるから、市場價格とみなし得るであろう。T. p. 148 譯(一)二八二頁)普通利潤、(これは平均利潤とみなし得るであろう。T. p. 30 譯(一)一七四頁)、費用(これは賃銀が大部分を占むる)、この三つの要因の變動を

見ることによつて、地代の變動についてのスミスの考え方を一應構成し得る譯である。

# (1) 農産物價格

スミスは第十一章の地代論の約半分を費して、「最近四世紀間における銀の價値の變動に關する餘論」を挿入している。この餘論は銀の價値の變動を論じているかの如くであるが、その内容は穀物價格論に外ならない。ここにおいてスミスは穀物の價格は一見變動したように見えるけれども、變動したのは銀の價値であつて、穀物の實質價格は殆んど變動しないことを説明する。少し長いがこの點についてのスミスの結論的な言葉を引用しよう。「穀物の平均の貨幣價格がこのように變動したのは、穀物の實質的平均價値が下つたためと見るよりは、むしろヨーロッパの市場において銀の實質的價値が漸次に騰貴した結果と考えた方が、むしろ妥當であらう。すでに述べたように、穀物は長い期間をとつて見れば、銀または恐らくは他の如何なる商品よりもより正確なる價値の尺度である。アメリカの豊富な鑛山の發見後、穀物が從來の貨幣價格の三、四倍に騰貴したが、この變化は一般に穀物の實質的價値が騰つたことに歸せられないで、銀の實質的價値が下つたことに歸せられた。されば、もしこの世紀の初めの六十四年間に穀物の平均貨幣價格が前世紀の大部分を通じての價格以下に若干下つたとすれば、われわれは同様に、この變化は穀物の實質的價値の變化であるとは考えないで、ヨーロッパの市場における銀の實質的價値が若干上騰したのだと考えるべきである。」(L. p. 198 譯(一)三七八—九頁) ここで穀物の實質的價値は一應コンスタントだと考えられているが、その貨幣價格は銀の實質的價値の低下と共に漸次上騰し、しかもそれは氣候や穀物獎勵金の影響によつてさらに高められたという。このように穀物の價格が漸次騰貴して行くと考えられる限りそれは地代を増加せしめる要因であるということができる。

## (2) 平均利潤

資本主義の發展とともに、平均利潤が低下の傾向にあることは、『國富論』の第九章の各所において指摘されている。たとえば、「賃銀を騰貴せしめるところの資本の増加は利潤を低める傾向がある。」(T. P. 譯(一)一七三頁)と。スミスはこの傾向を利子率から推定して、歴史的にも確認している。このように平均利潤が漸次低下の傾向にあると考えられる限り、それは地代を増加せしめる要因であるといふことができる。

## (3) 費用

これは「借地人が種子を買い、勞働に支拂い、家畜その他農業用具を購入・保持するに要する資本を償うに足るもの」(T. P. 譯(一)二八〇頁)である。この内で大きな部分を占めるものは賃銀であらう。ところでスミスによれば、賃銀は國富の増大とともに騰貴の傾向にある。何故なら、國富の増大→賃銀基金の増大→勞働者に對する需要の増加→賃銀の騰貴、という一聯の因果關係が想定されているから。(第九章)ここで賃銀の騰貴が勞働者人口の増加となり、結局需要と供給とが一致して、彼と彼の家族の生活費に賃銀が歸着するという、いわゆる賃銀基金説的な考え方を見逃すことが出来ないが、それにしても、たとえ賃銀は騰貴するとしても賃銀を騰貴させる同じ原因たる資本の増加は、勞働生産力の増進となつて、その商品を生産するに必要な勞働量を減少し「その所要勞働の量の減少は勞働の價格を償うて餘りがある程である。」(T. P. 譯(一)一七一―二頁)というスミスの主張は重要である。このようにこの費用部分が漸次減少して行くと考えられる限り、それは地代を増加せしめる要因であるといふことができる。

以上地代の變動の要因となる、農産物價格、平均利潤、費用、この三つを検討することによつて、スミスにお

いて地代は騰貴の傾向にあると考えられていることを析出した。ところがいうまでもなく、地代の騰貴についてのかかる論證のしかたは、マルサス的なものである。すなわちこの點についてマルサスは次のように書いてゐる。「地代の騰貴と低落を支配する法則を一層詳しく觀察して行く場合、耕作の出費を減少し、あるいは生産物の價格に比較して生産用具の費用を減少せしめるところの主要なる原因を擧げるとは特に必要である。これらの主なるものは次の四つであると思われる。——第一に、資本の利潤を低下せしむるが如き資本蓄積。第二に、労働の賃銀を低下せしむるが如き人口の増加。第三に、一定の結果を招致するに必要な労働者數を減少するが如き農業上の改良、もしくは勸勞の増加。第四に、生産の出費を名目上低下せしむることなしに、この出費と生産物の價格との間の差額を増加せしむるであろうような、増加せる需要による農業生産物の價格における騰貴<sup>1)</sup>」從つて地代の騰貴についてのスミスの論證のしかたが、單に前述の如きものであるならば、労働生産力の増進と資本蓄積という、富の増進についての彼の基本的考え方を殆んど前提してゐないのである。ところが地代の騰貴についてのスミスの論據は、より直接的に彼の富の増進についての基本的考え方と結びついている。

地代の變動についてのスミスの直接的な説明は、第十一章の結論において與えられる。そこでのスミスの説明は次のようである。(一) 改良および耕作の擴張は、實質的地代 *the real rent* を直接的に騰貴せしめる傾向がある。何故なら地主の生産物に對する分前は、生産物の増加に從つて必然に増加するから。(二) 労働生産力におけるあらゆる改良は、直接的には製造品の實質的價格を引き下げ、間接的には土地の實質的地代を騰貴させる。(三) 社會の實質的富および有用労働量の増加は、すべて間接的に土地の實質的地代を騰貴せしめる傾向がある。何故ならこの労働の幾部分かは自然に土地に赴き、そこでの生産物を増加するから。(L. p. 247-8 譯 (一) 四六六



一四七〇頁）右の論點をさらに整理すれば、（一）社會内の資本が増加すれば、その内の幾部分かは自然に農業に投下される。（二）資本の増加は、改良および耕作の擴張となつて、生産物は増加する。（三）工業における勞働生産力の増進は、農業におけるそれより相對的に大である。ということになるだろう。

ところでスミスのこのような考え方は、「本章の結論」 conclusion of the chapter として、第十一章の最後の所にのべられている。この點についてキヤナンは、本章の結論は第十一章の議論の總決算ではなく、單に本章の最後 end of the chapter の部分を意味しているに過ぎず、従つてわれわれは、この中に含まれている諸命題を證明するためには、主として結論そのものを見なければならぬ<sup>2)</sup>、といつてゐる。確かにここでの諸命題は、「結論」の部分そのものに即して分析されなければならない。しかしながらその證據は餘りにも簡單であるから、これ以外の箇所をも參照して、地代の變動についてのスミスの證據が如何に彼の基本的視角を前提にしているかを次に見よう。

### （1）資本蓄積論

スミスによれば、以前には都會の方が農村よりも利潤が大であつたから、資本は自然に農村を去つて都會に集まつた。（U. p. 137 譯（一）二四五頁）ところが今やそのために都會に多くの資本が蓄積され、「資本が増加すれば、競争が増加して、必然に利潤を減らせる。この都會の利潤低下は、資本を田舎に追ひ出す、……かくして、それはいわば土地の表面に據がり、また農業に使われ、その昔田舎を犠牲にして大々的に都會に蓄積したその田舎に、ある程度まで還元されるのである。」（U. p. 139—130 譯（一）二四九—二五〇頁）このような事情は第三篇第四章「都會の商業は如何に田舎の改良に貢献したか」において歴史的に敘述される。しかし、こうした農業にお

ける資本の相對的稀少による高利潤という、いわば需要・供給に基く説明の外に、第二篇においてスミスは、資本蓄積論の基礎をなす生産的勞働の議論と關聯して、この點をより積極的に説明している。

「すべての資本はただ生産的勞働のみに當てられるものではあるが、同量の資本が働かせることの出来る勞働の量は、資本の用途が異なるに従つて著しく異なる、同様に、その使用がその國の土地および勞働の年々の生産物に附加するところの價值もまた著しく異なる。」(L. p. 340 譯(一)一五四頁) すなわち國富が資本の絶對量に依存することは勿論であるが、等量の資本を前提すれば、その用途の異なるに従つてより多くの生産的勞働を働かし得るかどうかが異なり、かくしてまたより多くの富を生産するかどうか異なる。そこでスミスは資本の用途を四種に分ち、生産的なものより次のように順位をつける。(一)農業、(二)製造業、(三)商業(國內商業、外國貿易、仲介貿易)。では何故農業が第一位に位するか。ここでスミスは有名なフィジオクラートの説明を持ち出してくる。すなわち農業においてはまた自然も人間と一緒に勞働する。そして自然の勞働は何らの費用も要しないが、その生産物は最も費用のかかる勞働者の生産物と同様にその價值をもつているというのである。(L. p. 343 譯(二)一六〇頁) ここにおいても、一般的地代の基礎となるべき、農業に投ぜられた資本が、他の部門に投ぜられた資本よりも最も多くの生産的勞働を動かす、という主張の限りにおいて、フィジオクラートの考え方が採用されている。

勿論、以上のことは社會的に見た場合のことであつて、資本の所有者をして、その資本を如何なる用途に供するか、を決定せしむる唯一の動機は、彼自身の利潤に對する願慮である。従つて、「資本が種々の用途の内、どれに使われるかに従つて、生産的勞働を活動させる上においてどれ程の差を生じるか、また、その社會の土地お

よび勞働の年々の生産物に價值を加える上においてどれ程の差を生じるか、さういうことは彼の思慮に全然入らなす。」(L. p. 354 譯(一)一七九頁)しかし、「利潤が等しいかまたはほぼ等しい場合には、大概の人間は、彼の資本を製造業もしくは外國貿易に使用するよりも、土地の改良、耕作に使用する方を選ぶであろう。……土地にその資本を使えば、彼はよりよくそれを監視支配することが出來、彼の財産を事變のために失う恐れもヨリ少い」(L. p. 356—譯(二)一八四頁)から、人類の制度が右の如き自然的傾向を阻害しないならば、資本は前述の如き自然的秩序に従つて投下されるのである。

ここに個人の利己的活動と社會の利益との豫定調和が如實に示されているが、それはともかくとして、スミスにおいて地代が騰貴するという場合の論據の一つ、すなわち社會の資本の増加のうち、その幾部分かは自然に農業に投下されるという點は、フィジイオクラートの生産的勞働概念からであるにせよ、彼の資本蓄積論の基礎をなす、生産的勞働概念の上に基礎づけられていることが確認されねばならない。

ところでスミスは、第二篇第一章で資本の區別を論じる際、固定資本の内容を四種に分ち、その第三に土地の改良を挙げ、土地の開拓、排水、圍い込み、施肥などによつて改良された農場は、「勞働を容易にしかつ省略する有用なる機械……と同視して少しも差支がない。」(L. p. 356 譯(二)一六頁)といつてゐる。そして、「改良の擴張、耕作の改善の結果として、土地が穀物を生産するのにヨリ適するようになる」(L. p. 356 譯(二)四五五頁)のである。このようにして、農業の資本が増加することは、具體的には土地の改良耕作の擴張となり、生産物の増加となつて現われる。そして農業におけるかかる生産物の増加が、直ちに地代の増加となると考えられたのである。ここに價值の増加と富の増加、従つてまた價值の形成とその實現が調和的に考えられていることはいふま

でもない。

## (2) 勞働生産力の増進

スミスによれば、勞働の生産力を増進させる第一の原因は分業であつたが、第一章を中心とする分業論において、農業においては、農業勞働の特殊性より分業が行われ難いことを指摘している。一般に、「分業は、それが採用される限りにおいて、どんな技術においても、勞働の生産力をそれに應じて増進させる。」(U. p. 7 譯(一)二五頁)のであるが、農業においては製造業におけるように、性質上そんなに細かく勞働を區別することも、各種の業務相互を完全に分離することも許されない。だから、「農業に使われる勞働のこれ等のあらゆる部門を完全に充分に分離させることが出来ないということが、恐らくは、この技術における勞働の生産力の改善が、何故に製造業におけるその改善に及ばないかの理由なのであらう。」(U. p. 8 譯(一)二六頁)ということとなる。次にスミスによれば、「勞働を簡易化しかつ省略するところの機械の發明はもともと分業に由來すると思われる」(U. p. 11 譯(一)三三頁)のであるから、農業において分業が工業のそれに比して相對的に困難だということは、また農業においては機械の發明、改良が困難だということになり、この點からも農業における勞働生産力の低位が説明される。

スミスは以上のように、彼の勞働生産力の理論、特に分業論の觀點から、農業における勞働生産力が工業のそれよりも相對的に低いことを基礎づけた。従つて一般に勞働の生産力が増進すれば、製造品の實質價格は農産物よりもヨリ低落し、農産物の價格は相對的に高くなる。そこで農業資本の利潤を一定とすれば、その差額だけ地代が増加することとなる。

以上の如く、スミスにおける地代の變動は、直接、彼の基本的視點である勞働生産力、資本蓄積という點より基礎づけられたものであつて、イギリス古典經濟學において、スミス特有なものといわなければならぬ。

(1) Malthus, *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated*, 1815, p. 23

なおミルサスのこの書での論點が、リカドの「低廉なる穀價が資本の利潤に及ぼす影響を論ず」一八一五年によつて追加された點については堀徑夫「地代論史」一七一頁以下参照。

(2) Cannan, *Ibid.*, p. 311

(3) この點と關聯してスミスは、いわゆる收穫遞減の法則を認めて次のように書いてゐる。

「しかるに、ヨーロッパの現状においては、地主の分前は、土地の全生産物の三分の一を超えることは稀であつて、時としては四分の一にも及ばない。しかしながら、この國の開花したすべての地方においては、地主の地代は昔に比すれば三倍、四倍となつてゐる。そしてこの年々の生産物の三分の一乃至四分の一に過ぎないものが、往時における全地代の三倍にも四倍にも當るらしいのである。すなわち、文明の進歩につれて、地代は土地の面積に比例して増加するけれども、その生産物に比しては減少するのである。」(L. p. 317 譯(二)一一三頁)

## 五

シンペンターもいつてゐるように、「古典學派のいう諸國民は、單純に無定形のものではなく、諸階級に分たれたものであつた。すなわち地主の階級、勞働者の階級および資本家の階級である。これらの階級は特に經濟的機能と利害とを實體化したものであつたが、しかし決して單なる抽象物ではなくて直接に存在する社會諸階級と合致すべきものであつた。」ここでの古典學派という言葉は何よりもスミスを意味しなければならない。すなわちスミスは、資本主義社會の基本的階級を、賃銀勞働者、資本家、地主という三大階級として把握し、これら

の階級の所得形態たる賃銀、利潤、地代は、他のあらゆる階層の諸所得の基礎をなしていることを明かにした。そしてこの三つの基本的階級が、夫々、彼が生きた十八世紀中葉のイギリス社會の全般的利害とどのような關係にあるかを、『國富論』第一篇の箇所において考察している。

いま、地主階級について見れば、いやくも社會の事情における一切の進歩は、直接にか間接にか土地の實質的地代を高め、地主の實質的富を増加することとなる。従つて地代の收得によつて生活している地主階級の利害は、社會の全般的利害と嚴密に一致する。そこでもし、土地の所有者にして自己の階級の利益について一應の知識をもつてゐるならば、彼等自身の階級特有の利益を増進しようという見地に基いて、社會を誤導するようなことはない、というのである。

われわれは、スミスの地主についてのかかる階級觀の基礎に、彼の全地代論が集約されているのを見なければならぬ。しかもスミスのいう地代を、以上において分析したように國富の増進という『國富論』の基本的視角から見る時始めて、國富の増進と地代の増加との一致を媒介として社會の一般利益と地主階級の利益との一致という命題を、正しく理解し得るのである。

(1) J. Schumpeter, *Epochen der Dogmen- und Methoden-geschichte, in Grundriss der Sozialökonomik* 1, 1914, S. 73